

第 1 1 分 科 会

研究主題

基礎・基本の定着を図る体育学習指導のあり方
ー獲得した知識・技能を生かす活用型の学習を通してー

福岡教育大学附属福岡中学校

日 程

10:30	10:55	11:45	12:00	13:00	13:10	14:20	14:50	15:00
受 付	公 開 授 業	授 業 質 疑	昼 食	開 会 行 事	研 究 研 究 発 協 表 議	指 導 助 言	閉 会 行 事	

公開授業案内

公開授業 第1学年 「柔道」 体育館

学校所在地図



交通機関

- 最寄駅
「唐人町(福岡市営地下鉄)」下車 徒歩13分
- 経 路
博多 発 8:31 8:34 8:37
↓ 福岡市営地下鉄空港線
唐人町 着 8:42 8:45 8:48

学 校 概 要

学 校 名	福岡教育大学附属福岡中学校		
校 長 名	坂 本 隆 則		
学 級 数	12学級	生 徒 数	371名
所 在 地	〒810-0061 福岡市中央区西公園12番1号		
連 絡 先	TEL 092-771-8381 FAX 092-732-1147		

【学校紹介】

福岡教育大学附属福岡中学校は、福岡市中心部よりやや北西に位置し、「日本の桜名所百選」にも選ばれている「西公園」や市民の憩いの場である「大濠公園」が側にある。福岡市の中心地近くにありながら緑に囲まれ、落ち着いた環境にある。本校は、昭和22年4月、福岡第一師範学校男子部附属中学校として誕生した。その後、学校名が幾度か改称され、現在に至っている。

【沿革】

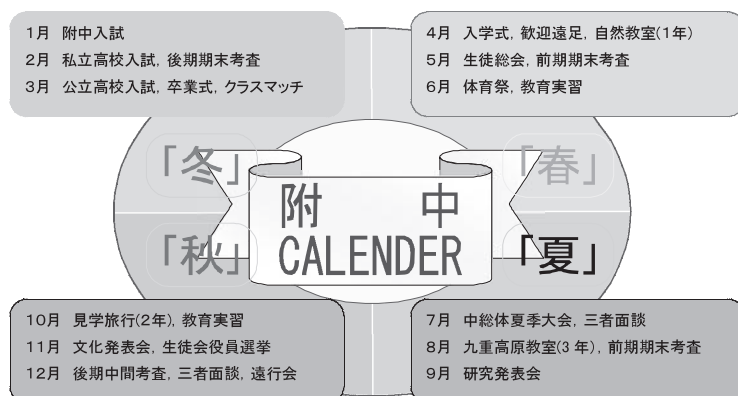
昭和22年4月 福岡第一師範学校附属中学校として開校
 昭和26年4月 福岡学芸大学附属福岡中学校と校名改称
 昭和41年4月 福岡教育大学教育学部附属福岡中学校と校名改称
 平成16年4月 国立大学法人 福岡教育大学附属福岡中学校

教育目標として、『われ日本の大樹とならん』を掲げ、次の校訓の則り、心豊かにたくましく、主体的、創造的に生きることのできる生徒を育成することをめざしている。

【校訓】

『行第二里』…指示や命令、義務以上に自ら進んで善を行い、世につくす。
 『一歩々行万里』…万里の道も一步一步から。まず一步を踏み出し、たゆまぬ努力で、目標を達成する。
 『不動心』…失敗、困難に遭遇しようとも屈することなく、創造的に前進する。

【学校行事】



研究主題

基礎・基本の定着を図る体育学習指導のあり方

ー獲得した知識・技能を生かす活用型の学習を通してー

福岡教育大学附属福岡中学校

1 主題設定の理由

(1) 本校研究の過程から

本校では、平成17～19年度の研究において、「豊かに生きるためのリテラシー獲得をめざしてー基礎・基本の転移を促す学びの文脈づくりー」を主題とし、各教科における生徒の学びを総体的にとらえ、そのプロセスを評価し、それらを指導に生かす実践を推進してきた。その経過で浮かび上がってきたのが、リテラシー獲得をめざす視点である。リテラシーの概念は、時代とともに変容してきており、現在も種々の議論がなされているが、概ね「社会人として活躍するために必要とされる共通教養」という学力に関わる幅広い概念であるにとらえられる。この視点から、よりよい社会及び人生の実現につながる学びのあり方について追究していくことは、「生きる力」を育む授業のあり方を明らかにすることにつながるものとしてきた。

このことを踏まえ、本校では、PISAをはじめとする様々なリテラシーの議論を参考にして、各教科で「豊かに生きるためのリテラシー」を獲得した姿を想定し、実践的研究を進めてきた。その際、「豊かに生きるためのリテラシー」獲得につながる基礎・基本、すなわち転移させるだけの意味や価値のある教科ならではの現実世界と交渉するための知的ツールを教科の基礎・基本とした。転移とは、新しい知識の学習も必要とする新たな状況で、古い知識を適用することであり、人が社会に適応して生きていくためには欠かすことのできない重要な心のはたらきである。転移は目標であると同時に、評価に利用することもできると考えられる。つまり、学習していることを記憶しているかどうかを基準にするのではなく、別の問題や状況に転移できるかどうかを基準にすることによって、どのようなリテラシーがどの程度獲得されているのか、教師の学習指導法は適切であったのかなどの評価が可能であるにとらえてきた。

そこで、本校保健体育科では、培うべき「豊かに生きるためのリテラシー」を「生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現するための共通教養」ととらえ、そのための基礎・基本をこれまでの実践を踏まえ、「運動の特性の視点」として整理した。さらに、この保健体育科におけるリテラシーの獲得のために、基礎・基本の転移を促す学びの文脈づくりを構想してきた。また、生徒たちに、基礎・基本の意味や価値を実感させることができる授業デザインの実践研究に取り組んできた。このような研究の過程を踏まえ、本研究主題を設定した。

(2) 大会主題とのかかわりから

今日、運動やスポーツを楽しむことは、豊かな生活をめざす現代人にとって必要不可欠と言っても過言ではない。特に、体力の向上、健康の保持・増進のために、生涯にわたって積極的に運動やスポーツに関わることは、とても大切なこととされている。そのため、中学校保健体育科では、生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現するための資質や能力、健康で安全な生活を営む実践力及びたくましい心身を育てることをめざしてきた。しかし、子どもたちの状況をみると、体力低下傾向に歯止めがかからないこと、運動やスポーツに対して活発に運動する子どもと、そうでない子どもとに二極化してきていると言われている現状がある。このような中で告示された中学校学習指導要領解説ー保健体育編ー（平成20年9月）の改善の基本方針の中に、次のようにある。

体を動かすことが身体能力を身に付けるとともに、情緒面や知的な発達を促し、集団的活動や身体表現などを通じてコミュニケーション能力を育成することや、筋道を立てて練習や作戦を考え、改善の方法などを互いに話し合う活動などを通して論理的思考力を育むことにも資することを踏まえ、それぞれの運動が有する特性や魅力に応じて、基礎的な身体能力や知識を身に付け、生涯にわたって運動に親しむことができるように発達の段階のまとまりを考慮し、指導内容を整理し、体系化を図る。

ここで、着目すべき点は、「子どもたちの発達の段階を考慮しつつそれぞれの運動が有する特性や魅力に応じて指導内容を整理する」と明記されていることである。これは、学習場面で取り上げる運動やスポーツが、どのようなしくみで成り立っているのか、その骨組みを把握することが重要であり、1つ1つの動きやプレーがその運動やスポーツの技術として成り立っていることの根拠、すなわち「意味の世界」に子どもたちを導きながら学習活動を展開することの大切さを示唆しているのとらえる。このような学習活動を通して、子どもたちは、運動やスポーツの魅力に触れ、その楽しさやよさを実感しながら生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現するための資質や能力をはぐくむことができると考えられる。

このようなことを踏まえ、本大会主題における「体育的学力」ととらえる「技能」「態度」「知識、思考・判断」を確実に身に付けさせ、運動の楽しさを味わわせるためには、獲得した知識・技能を活用して課題解決をする学習活動を仕組む必要があると考え、本主題を設定した。

2 主題の意味

(1) 「基礎・基本の定着を図る」とは

保健体育科の目標を達成し、内容を習得させるための課題解決のツールを教科の基礎・基本とし、その意味や価値を実感させながら、生徒たちに確実に身に付けさせることである。

前述したように、学習指導要領に示された教科の目標及び内容に通底している基本的前提を課題解決の知的ツールととらえ、それらを教科の基礎・基本と本研究ではとらえている。つまり、教科の目標を達成し、内容を確実に習得させるために、課題解決の過程において鍵となるツールを教科の基礎・基本としている。

中学校保健体育科では、究極的な目標として、「生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現するための基礎を培う」ことをめざしている。そのために、それぞれの運動が有する特性や魅力に応じて、確実に内容を習得させることが必要であると言われている。言い換えれば、運動のもつ魅力や特性を生徒たちに十分につかませることで、その運動に必要な内容の習得が図られると考えられる。つまり、その運動のもつ魅力や特性の視点をもって運動の行い方を工夫したり、作戦や戦術を考えたりしながら課題解決にあたることで、確実な内容の習得につながると考えた。

そこで、保健体育科における基礎・基本を「運動の特性の視点」として整理し、その意味や価値を生徒たちに実感させながら、課題解決のツールとして確実に身に付けさせたいと考えた。

(2) 「獲得した知識・技能」とは

学習の過程において、生徒たちが課題の解決のために有効に働くと実感し、獲得した保健体育科における内容のことである。

運動の学習過程において、生徒たちは様々な知識や技能を学ぶ中で、理解したり、うまくできるようになったりするために、試行錯誤を繰り返していく。その中で、直面した課題に対して有効に働くと実感した知識や技能は、身に付けておく価値があるものとして、生徒たちはとらえていくと考える。この獲得した知識・技能は、保健体育科の基礎・基本である「運動の特性の視点」から拡がった内容として考えられ、課題解決のためのツールとしてとらえられていくと思われる。

(3) 「獲得した知識・技能を生かす活用型の学習」とは

生徒たちに新たな課題や場面に出会わせ、これまでに獲得した知識や技能が使えるよさを実感させながら課題解決を図る学習活動のことである。

生徒たちは、学習の過程において直面した新たな課題や場面に対して、獲得した知識・技能を使って解決していこうとしていく。このときの課題解決のために使おうとする知識・技能は、生徒たちが使う価値があると感じているものであり、課題の解決を図ることによって、そのよさを実感させていく。このような、身に付けた知識・技能を生かして活用しながら課題解決をしていく学習によって、学んだことが生きる楽しさを味わうことができ、思考・判断する力を高めながら真の意味で知識・技能を習得したと言えると思われる。つまり、このような学習を仕組むことが、「技能」や「態度」、「知識、思考・判断」を確実に身に付け、体育的学力の確かな定着につながるものと考ええる。

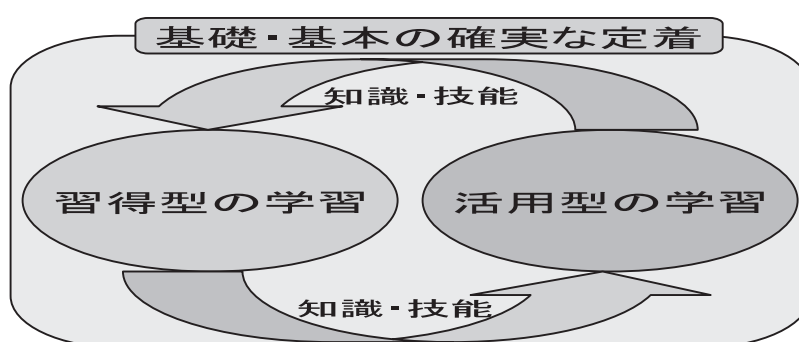
3 研究の目標

獲得した知識や技能を生かす活用型の学習を学習過程の中に仕組み、保健体育科における基礎・基本の定着を図る体育学習指導法のあり方を究明していく。

4 研究の仮説

保健体育科の学習において、確かな「体育的学力」の獲得に向かう環境や運動課題の選定に留意し、獲得した知識や技能が使えるよさを実感させながら、課題解決を図る活用型の学習を学習過程の中に仕組み、生徒たちは、保健体育科における基礎・基本について、その意味や価値を実感させながら確実に身に付けさせることができるであろう。

5 研究の構想



6 実践事例 第3学年 「柔道の技に挑戦しよう」

(1) 実践のねらい

柔道は、オリンピックの競技として定着しており、1つのスポーツ競技としてとらえられることが多い。しかし、本来は、「礼に始まり、礼に終わる」といった伝統的な行動の仕方を大切に、自己を制御しつつ相手を尊重するなどの態度が重視される武道である。柔道は、古来より日本に伝わる「柔術」に新たな技術的工夫を加えて体系化した体育・勝負・修心の道であり、相手を抑え込んだり投げたりするために、対人的技能を身に付けて攻防をする武道である。そのため、柔道は、「精力善用」「自他共栄」を基本理念としており、競技における単なる勝利至上主義ではなく、心身の力を最も有効に使用する道であると言われている。このような特性をもつ柔道の本質の理解をめざすことは非常に意義深いと考える。

そこで、本実践では、基本動作を身に付け、合理的に相手を投げたり抑え込んだりする柔道の楽しさや喜びを味わい、柔道の魅力に迫ることをねらいとした。学習すべき内容として、相手の動きに応じた基本動作から、基本となる技を用いて投げたり、抑えたりするなどの攻防を展開すること、相手を尊重しながら伝統的な行動の仕方を守ろうとすることなどがある。つまり、生徒たちに抑え技や投げ技の構造を考えさせながら技を身に付けさせ、相手の動きの変化に応じた攻防を展開できるようになることをめざすことで、柔道の理念を体感させることになると考える。このことを通して、柔道が持つ特性の本質に触れ、柔道の特性の理解をめざすことにつながると考える。

(2) 本実践の基礎・基本

保健体育科では、「運動の特性の視点」を基礎・基本として設定し、ツールとして使いながら課題解決を図ることを通して、その意味や価値を実感させることができると考えている。本実践では、「運動の特性の視点」としての基礎・基本を「力を合理的に使うこと」としてとらえ、相手の動きの変化に応じた攻防を展開する楽しさを味わわせたいと考えた。そのことを通して、「技の構造と基本動作」「相手を動かして自分の力をうまく使った技」「相手の力や動きを利用した技」についての理解を深めるために本実践を構想した。

(3) 計画 12時間

次	時	学習活動・内容	手だて	評価規準
一	1	1 礼法と柔道衣の扱い方、 武道領域の学習の進め方 について確認する。 ・礼法 ・柔道衣の扱い方 ・武道領域の学習の進め方	○ 柔道のイメージを想起させながら、学習への動機付けを行うとともに柔道の特性について確認させる。 ○ 礼法の意義や目的について考えさせ、正しい礼法を身に付けさせる。	関：自分のもっているイメージから柔道のよさを想起し、進んで学習に取り組もうとしている。 知：礼法の重要性や柔道衣の扱い方について書き出している。
二	3	2 抑え技の練習をする。 ・抑え込みの条件 ・けさ固め ・横四方固め ・上四方固め ・うつぶせ、仰向けの攻め方	○ 抑え技のポイントを身に付けることができるように、VTRや資料を参考にさせながらポイントを確認させ、約束練習をさせる。 ○ 抑え技の自由練習では、背中合わせの姿勢からはじめさせる。	思：「抑え込みの条件」を満たして相手を抑えるための課題を見つけている。 技：抑え技のポイントを身に付け、「抑え込みの条件」を満たして抑えることができる。

三	6	3 投げ技の練習をする。 (1) 投げ技の約束練習をする。 ・基本動作 (姿勢、組み方、くずし、体さばき、受け身) 〈刈り技系〉 ・大外刈り 〈まわし技系〉 ・体落とし (2) 相手の動きに応じた投げ技の約束練習をする。 ・基本動作 (姿勢、組み方、進退動作、くずし、体さばき、受け身) 〈支え技系〉 ・支えつり込み足 〈刈り技系〉 ・大内刈り 〈まわし技系〉 ・背負い投げ	○ 投げ技のポイントや基本動作を身に付けることができるようにVTRや資料を参考にさせながらポイントを確認させ、パートナーと約束練習をさせる。 ○ 約束練習では、力を合理的に使うことができるように、「くずし」や「体さばき」を意識させる。 ○ 「くずし」や「体さばき」がわかりやすいように、「受」が自然体で立っている状況で練習をさせる。 ○ 「くずし」や「体さばき」について考えさせるためにVTRを視聴させ、つり手、引き手の使い方を工夫させながらパートナーと約束練習を行わせる。 ○ 投げ技の自由練習につなげるために、相手の動きに応じた投げ技の約束練習に取り組みせ、相手の動きや力をうまく使って技をかけることができるような進退動作を身に付けさせる。	思：投げ技の約束練習で、自分の課題を投げ技の局面（くずし、つくり、かけ）の視点で考え、解決のための方法を見つけている。 技：投げ技の約束練習でくずしや体さばきと関連させながら投げ技をかけ、相手を投げることができる。 思：「くずし」や「体さばき」を意識し、相手の動きに応じながら、つり手、引き手の使い方や進退動作を工夫している。 技：つり手、引き手の使い方や進退動作を身に付け、相手の動きに応じて投げるができる。
四	2	4 学習全体のまとめをする。 (1) 投げ技の自由練習をする。 ・礼法 ・投げ技 (体落とし、大外刈り、支えつり込み足 など) (2) 学習全体を振り返り、成果と課題についてまとめる。 ・抑え技、投げ技の基本動作	○ 安全上を配慮しながら、練習した技を動きの中でかけさせるため、「受」「取」の条件を付けた自由練習を行わせる。 ○ 自分の技の高まりの視点で、学習全体を振り返らせ、自分が感じた柔道の高さや感想を学習カードに記入させる。	関：相手を尊重する態度を身に付け、お互いに励まし合いながら進んで自由練習に取り組もうとする。 知：自分の技の高まりの視点で成果と課題をまとめ、上達するためのポイントを書き出している。

関：関心・意欲・態度 思：思考・判断 技：技能 知：知識・理解

(4) 授業の実際

計画の一次は、柔道のイメージを想起させながら学習への動機付けを行い、礼法や柔道衣の扱い方、学習の進め方を確認する本単元のオリエンテーションとしての位置づけとした。特に正しい柔道衣の着方、正座のしかた（「左座右起」）と座礼、立礼のしかたなどの学習を行わせ、柔道の学習における礼法の重要性の理解を深めることができるように配慮した。また、単元全体を通して準備運動や練習に取り組む練習パートナーを決めさせ、お互いに協力させながら学習を進めていくことができるようにした。

【資料1】練習パートナーとのストレッチ



二次は、抑え技の学習を行わせ、「抑え込みの条件」を満たして相手を抑えるための合理的な力の使い方について理解を深め、抑え技を確実に身に付けさせることをねらいとした。ここでは、「けさ固め」「横四方固め」「上四方固め」を取り上げ、ポイントを理解させながら抑え技を身に付けることができるように、VTRや資料を参考にさせながら約束練習を行わせた。このときの約束練習では、練習パートナーと「受」「取」を交互に行わせ、相手の柔道衣のつかむところ、抑える位置と体重のかけ方について確認を行わせ、しっかりと抑えることができるように、「受」に抑えた状態から10秒間動く約束練習にも取り組ませた。また、練習パートナー以外のほぼ体格が近い生徒同士を組ませ、背中合わせの状態からの抑え技のみの自由練習を行わせた。ここでは、柔道のルールとして、「抑え技の条件」について確認させ、柔道衣の袖口に手を入れないこと、無理な体勢になったときには合図をして組み直すことなど、安全に配慮して行わせた。

三次は、投げ技の学習を行わせ、相手をうまく投げるための合理的な力の使い方について理解を深め、投げ技を確実に身に付けさせることをねらいとした。そのためにまず、「受け身」の練習を行わせた。ここでは、「後ろ受け身」「横受け身」「前回り受け身」を取り上げ、「受け身」の役割を確認させ、練習に取り組ませた。その際、相手の押す動きや引く動きに合わせて「受け身」がとれるように、片ひざをついた状態から練習パートナーと手をつながせて練習に取り組ませた。次に、投げ技において、相手をうまく投げるためには、「くずし」や「体さばき」が必要であることを感じ取らせるために投げ技の約束練習を行わせた。ここでは、「体落とし」「大外刈り」を取り上げ、ポイントを理解させながら投げ技を身に付けることができるように、VTRや資料を参考にさせながら練習パートナーと約束練習を行わせた。その際、「くずし」や「体さばき」がわかりやすいように「受」が自然体で立っている状態で練習を行わせた。また、「取」のときには「引き手」を放さないこと、「受」のときには相手にしがみつけないことなどの安全上の約束事を守らせながら練習に取り組ませた。このとき、学習カードには、技の「くずし」や「体さばき」、「つり手」や「引き手」のポイントについてまとめさせ、相手をうまく投げるための自分の課題や感想についてまとめさせた。また、この学習カードは、前時の振り返りや技のポイントの復習に使うようにさ

【資料2】抑え技の自由練習



【資料3】練習パートナーと「受け身」練習



【資料4】VTRを使って技のポイントの確認



【資料5】「体落とし」の約束練習



せた。生徒たちの記述をみると、「くずし」や「体さばき」について、正しく記録をすることができ、技のポイントについて、自分なりのことばで、わかりやすく記入することができていた。また、「くずし」や「体さばき」をうまく使って投げるためには、「つり手」「引き手」をうまく使って、技に入らなければならないことに気付いている生徒の記述もあった。

さらに、「支えつり込み足」の学習では、「体落とし」や「大外刈り」の学習でつかんだ知識・技能を生かして課題解決をさせる活用型の学習になるように生徒たちに課題を与えた。ここでは、「相手の動きに応じて支えつり込み足で投げるには…」という課題を与えた。その際、最初に「支えつり込み足」のVTRを生徒たちにみせ、「くずし」や「体さばき」はどうすればよいか、そのための「つり手」「引き手」の使い方をどのように工夫すればよいか、VTRからわかることを分析させ、練習パートナーと約束練習に取り組ませた。また、VTRは「受」の正面、後ろ、左側、右側の四方向から撮影したものを使用し、わかりやすく提示した。生徒たちは、これまでに学んだことを生かし、試行錯誤しながら技の練習に取り組み、しだいに「技」の構造を理解し、正しく「支えつり込み足」に入ることができるようになっていった。「支えつり込み足」のポイントを全体でまとめたあと、「受」に前後左右の動きをつけさせ、相手の動きに応じて技に入り、投げる工夫を考えさせながら練習に取り組ませた。ここでは、「取」がしっかりと「支えつり込み足」に入れば、「受」は自然に「受け身」をとるように行わせ、安全面に配慮した。このとき、「くずし」を考えれば、相手を動きに応じてタイミングよく引くこと、踏み込んだとき体を回転させるように開いて「引き手」引くこと、などの工夫をしながら積極的に技に入ろうとする姿をみることができた。

四次では、本実践のまとめとして自由練習に取り組ませた。ここでは、安全上を配慮しながら、練習した技を動きの中でかけさせるため、「受」「取」の条件を付けた自由練習とした。生徒たちは、一生懸命に技をかけながらも、よけたり踏ん張ったりする相手を投げることで、動

【資料 9】学習カード（「支えつり込み足」の記録）

6月12日 土曜日 4校時	
めあて 相手の動きに応じて支えつり込み足で投げるようにしよう。	
今日の学習内容	今日の「技」は…
（⑤・左）組みの… 支えつり込み足	「くずし」の方向は… 「体さばき」は…
「技」のポイントをまとめてよう	学習全体を振り返って
「くずし」は… 「体さばき」は… 「つり手」は… 「引き手」は…	「くずし」の方向は… 「体さばき」は… 「つり手」は… 「引き手」は…
◇「できたこと」や「わかったこと」 相手を一度遠くへおいた後、自分の所へ近づけるには、つり手と引き手がここでも重要なポイントに気付いた。	◇「できなかったこと」や「難しかったこと」 相手の足に自分の足をあてても、うまく投げられなかったり、力が足りない感じがした。

【資料 7】「支えつり込み足」の約束練習



【資料 8】相手の動きに応じて技に入る約束練習



【資料 9】学習カード（「支えつり込み足」の記録）

6月12日 土曜日 4校時	
めあて 相手の動きに応じて支えつり込み足で投げるようにしよう。	
今日の学習内容	今日の「技」は…
（⑤・左）組みの… 支えつり込み足	「くずし」の方向は… 「体さばき」は…
「技」のポイントをまとめてよう	学習全体を振り返って
「くずし」は… 「体さばき」は… 「つり手」は… 「引き手」は…	「くずし」の方向は… 「体さばき」は… 「つり手」は… 「引き手」は…
◇「できたこと」や「わかったこと」 相手を一度遠くへおいた後、自分の所へ近づけるには、つり手と引き手がここでも重要なポイントに気付いた。	◇「できなかったこと」や「難しかったこと」 相手の足に自分の足をあてても、うまく投げられなかったり、力が足りない感じがした。

く相手に対してタイミングよく技に入ることなどの難しさを味わっていた。また、最後には、学習全体を振り返らせ、成果と課題についてまとめさせた。抑え技や投げ技でくふうしたことや自分が感じた柔道のよさや感想を学習カードにまとめさせた。

【資料 10】学習カード（「柔道の学習を振り返って」）

①「抑え技」で相手をうまく抑えるために工夫したことは？ どくに一番力を加えるか、技に合わせ考えた。また、肩を床につけたままになるように、帯やスリをしっかりと持った。	②「投げ技」で相手をうまく投げるために工夫したことは？ フリ手の動かし方。相手の重心がくずしり方向に行くように、もつ位置や、持ち上げり方向を工夫した。
③柔道の「楽しさ」や「よさ」はどこにあると思いますか？ 相手や自分の動きを覚えてくるのが、相手の動きを読んだり考えたり、読み合うことがいいと思います。	④柔道の学習を振り返って全体的な反省や感想を・・・ 柔道を見る限りはとても楽しそうだったけど、自分がかげがしないう、また相手をかけさせないような技を身につけてやると、面白かった。体の使い方の原点を学べた。

(5) 考察

本実践では、「技の構造と基本動作」「相手を動かして自分の力をうまく使った技」「相手の動きを利用した技」についての理解を深めることを構想していた。そのために、投げ技における基本動作である「くずし」「体さばき」、また、それらをうまく行うために必要な「つり手」「引き手」の使い方を課題解決のために有効に働く内容としてとらえていた。多くの生徒が【資料9】にある「つり手・引き手が重要なんだと気付いた」というような記述をしていたことから、獲得した知識・技能を生かす課題を設定し、活用型の学習を仕組むことは、保健体育における基礎・基本につながる内容の意味や価値を実感させ、確実な定着につながることができる。また、【資料10】にあるように、投げ技では「相手の重心がくずしり方向に行くように」と工夫し、「相手の動きを読んだり考えたりすること」に柔道の楽しさを感じている生徒がいることから、本実践は、確かな「体育的学力」の獲得につながることができたと考える。

7 研究の成果と課題

(1) 成果

- 保健体育科における基礎・基本を「運動の特性の視点」として整理し、その視点から必要な知識・技能の内容を選定し、それらを生かす活用型の学習を仕組んだことは、生徒たちにその学習した知識・技能の意味や価値を実感させることができ、保健体育科における基礎・基本の確実な定着につながることができた。
- 運動課題の解決のために有効に働くと生徒たちが実感し、獲得した保健体育科における知識・技能を生かすために新たな課題や場面に出会わせたことは、「体育的学力」確かな定着につながることができた。

(2) 課題

- 保健体育科で取り上げる運動や種目の特性について、生徒たちの学びをつくるために、「基礎・基本」ととらえる「運動の特性の視点」の十分な分析。
- 活用型の学習において、生徒たちに出会わせる課題の可能性についての検討。